

日本語の「論理」に関しては、英語等の西欧語の「論理」と違うことが、今までも多くの論者によって指摘されてきた。なお、「論理」と括弧をつけているのは、厳密な意味での論理ではないからである。たとえば、日本語では主語がよく省略される。逆に、英語等では形式的な主語”it”等までも存在する。また、日本語は「なる」型言語であり、英語は「する」型言語であるという指摘もある。日本語の「論理」は英語等の西欧語の「論理」と違うのであろうか、それとも同じなのであろうか。もし違うとすれば、どのように違うのであろうか。この問題は、日本語と英語等の西欧語だけを取り上げて議論すべきではなく、他の多くの世界の言語の中において比較して考察すべきものであろう。これは認知類型論的な考察となる。また、日本語の「論理」の問題を広義の論理の立場からと狭義の論理の立場から考察するのも有意義であろう。したがって、本ワークショップでは、日本語の「論理」について、認知類型論と場所の論理と形式論理の3つの観点から考察する。

認知類型論から見た日本語の論理

個別言語の文法・語彙構造の背後には、その言語社会固有の伝達慣習を反映した「発想の型」というべきものがあるという認識が、認知言語学的な観点からの言語類型論研究において広く共有されてきた(池上 2000)。「認知類型論」というべきこの研究パラダイムには、「する」言語と「なる」言語の類型(池上 1983)やフレーム化の類型(Talmy 2000)などが含まれる。一般的に、類型論的な特徴を多く共有する言語間(例:日韓語)では、そうでない言語(例:日英語)に比べて、「発想の型」においても類似性が見られる傾向があり、また、地域的に隣接して文化的な接触が多かった言語間(例:日中語)では、共通の「発想の型」(例:「主題」)が観察されることが少なくない。しかし、最近の研究(堀江・パルデシ 2009)では、類型論的な特徴の共有や地域的な隣接性にも関わらず、「発想の型」がかなり異なる現象も観察されている。本発表では、認知類型論の最新成果を踏まえて日本語の論理(発想の型)を考察する。

「場所の論理」から見た日本語の論理

本発表では、場所の論理の立場から日本語の論理を解明し、合わせて、認知言語学の基本概念が、場所の論理に基づいていることをも明らかにしていく。中村(1989)では、アリストテレス以来の形式論理学を「主語論理」に立つものとし、一方で、西田哲学の場所の論理に基づいた「述語論理」を対置する。述語論理の立場は、時枝の「場面論」や三上の「主語不要論」などを媒介として、日本語の論理を明らかにするものとしている。場所の論理から明らかにされる言語現象として、概念的場としての「ハ」や、「起点―経路―着点」のイメージ・スキーマの具現化としての格助詞の体系の事例が挙げられる。認知意味論の立場からは、形式論理学は「容器のメタファー」に基づいていることが言われている

(Lakoff & Johnson 1999)。「容器の論理」は、広義には、場所の論理に基づいているものである。また、メタファー自体が述語的同一性に基づいた述語論理によって成立している。また、「図と地」や「参照点構造」などの認知言語学の基本概念の多くが、場所的観点を応用したものである。最後に、日本語以外の言語の事例も紹介し、場所の論理に基づく「場所の言語学」を提起していきたい。

形式論理から見た日本語の論理

本発表では、日本語の論理を形式論理（古典一階述語論理）の観点から考察し、日本語の論理の基本が古典一階述語論理の中の命題論理であることを示す。その概略は以下の通りである。論理はメタファーの形式といえる（月本 2009）。日本語の論理は基本的に空間の論理、すなわち空間のメタファーの形式である。例えば、日本語の助詞の多くは空間のメタファーとして捉えられる。さらに、最も重要な助詞「は」は（空間のメタファーの中で最も重要な）容器のメタファーとして捉えられる。したがって、日本語の論理の基本は、容器のメタファーの形式であるといえる。ところで、古典一階述語論理の中の命題論理は、命題の接続に関する論理といわれるが、厳密には命題論理は容器のメタファーの形式であり、これを通してわれわれは命題の接続を理解しているのである。上記の議論より、日本語の論理の基本は容器のメタファーの形式であり、命題論理が容器のメタファーの形式であるので、日本語の論理の基本は、古典一階述語論理の中の命題論理であるといえる。

主要参考文献

- 池上嘉彦(1983) 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店
池上嘉彦(2000) 『「日本語論」への招待』講談社
岡智之(2010) 「場所論の観点から認知言語学のパラダイムを再考する」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系Ⅱ 第61集』
月本洋(2009) 『日本語は論理的である』 講談社
中村雄二郎(1989) 『場所—トポス—』弘文堂
堀江薫、パルデシ・プラシャント(2009) 『言語のタイポロジー - 認知類型論のアプローチ - 』研究社
Lakoff & Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh*. Basic Books.
Talmy, Leonard(2000) *Towards a Cognitive Semantics*. 2vols. MIT Press.